

## 45 ベルツの北海道訪問と新史料「石狩紀行」(関場)

宮下舜一

ベルツ博士は、アイヌの人類学的調査のため北海道を二度訪問している。

最初の訪問は明治三十年(二八九七)の夏であり、石狩来札のアイヌ部落に赴いたことは、関場不二彦氏の「石狩遊記」に若干の記録がある。然しこの記録は雑著に綴り込まれた草稿断片で、来札での調査情況や、ベルツの動向については殆ど知る所が無かった。

ごく最近、著者は偶然の機会から前記の断片記録を完全に補充する元原稿が、関場家所蔵の未発表稿本の中に存在する事を知った。「師ベルツ先生に随い石狩川口来札村の樺太アイヌを誘うの記、並びに其の餘録(全編五章、附載二章)」を内容とし、「石狩遊記」を改題「石狩紀行」とする旨付記がある。本稿文は五〇丁に及ぶ和

紙に書かれた墨筆記録で、多数のスケッチ画、随所に欄外注記を見る。又ベルツから関場に当てた独文書簡四通の添付もある。本史料の発見によりベルツの第一回北海道訪問の全貌が判明し、翌年の第二回訪問についても多くの示唆が得られる。

関場は前年の十二月、名著「アイヌ醫事談」を出版した。これは恩師ベルツ博士にも贈呈され、賛辞を添えた独文謝状が存在する。

地道に研究を続けていたベルツの「日本人種論」の決着には、北海道に於けるアイヌの調査が不可欠の課題であった筈である。ベルツの明治三十年の北海道訪問は、関場の著書に触発された可能性が大である。

同年六月三十日午後、札幌に到着したベルツは早速関場氏を訪れ、来道の目的を述べて調査方法に就き相談している。関場の斡旋により、英国聖公会宣教師(アイヌ研究家)バチエラー氏が当時布教活動の中心としていた日高沙流郡平取へベルツを案内することになるが、バチエラー氏の都合で出発まで四、五日の余裕が生じた事から、石狩来札のアイヌ部落訪問が急遽関場により計画さ

れたと思われる。

(1) 民族学で師弟熱論の軽川光風館の一夜

七月一日夕刻札幌から軽川に至り、光風館（温泉）に一泊、翌早朝の石狩行きを目指す。晚餐一浴後、ベルツ博士お得意の顔貌観察による人種分類の解説に始まり、アイヌ形態人類学研究の現状に話が及ぶ。関場は多くのアイヌを観察した経験を踏まえてその身体形態的特徴を種々論じてベルツの意見を求めている。特に言語学の観点からアイヌ人種の北方渡来説の淵源を力説する関場の着眼にベルツは深い感銘を受けたようである。

(2) 来札の樺太移住アイヌ部落と墳墓

七月二日午前九時頃、石狩川対岸の来札に一行は到達する。ベルツはアイヌの家屋五、六軒を戸別に訪問して家族の身体観察を行ない、次いで近隣から集まった十数人（児童多し）についても調査が行なわれた。少人数の予備的調査ではあったが、ベルツは、特に児童の観察で得られた有意義な知見二点を挙げて、平取での更なる調査に期待を示している。

来札訪問で得られた最高の収穫は、他族の者には立ち

入りが極めて難しいアイヌ墓地の見学に成功し、樺太アイヌ独特の墓標多数を観察した事である。関場は「石狩紀行」の中に代表例十三について貴重なスケッチ図を描き詳細な説明を書き添えている。本史料の発見により後年ほぼ定説化した「墓標の形式から見たアイヌ系統分類」の図式は改めて一考の余地があるように思われる。

来札樺太アイヌ墓標には、ベルツも大きな関心を示し関場に対し当時は露領である樺太での調査の必要を助言している。

(3) 平取でのアイヌ調査

七月五日、師ベルツ、バチェラー氏と沙流に出発。駅頭手を分ち後日の再開を約す。

札幌・室蘭間の鉄道を利用したベルツの一行はその日の中に平取到着が可能である。又十一日には室蘭に戻っている。平取でのアイヌ調査は正味五日間である。

東京に戻ったベルツからは、早速平取での調査結果が関場の許に詳しく報告された。

（北海道医史学研究会）